

●特集●

保育者は日々の保育からどのように実践研究を行うのか

他の学会と異なる日本保育学会の特徴の一つは、研究者とともに多くの保育者（実践者）が会員となって積極的に活動している点にある。日々の保育の中から保育者自らが「問い」を立て、事例の記録などを手がかりにその「問い」を明らかにし、毎年5月に開催される年次大会で発表したり、学術雑誌『保育学研究』に投稿したりする保育者も少なくない。他方、自分もそうした実践研究を行いたいと願いながらも、具体的に何をどう行えば良いのか、何から始め、どのように成果をまとめ、発表や論文としてどう書き記せば良いのかが不明瞭であるため、実践研究の実施に尻込みしたり、躊躇したりする保育者もいるだろう。そこで今回は、実践研究を行う保育者にご登場頂き、日々の保育からどのように実践研究を行っているのか、その過程での苦労話や、実践研究を行うことの意義などについて、ご自身の経験を率直に開示して頂くような特集を組むこととした。

「実践の壁」が実践研究へと導く

井内 聖

2005年、約10年勤めた中学校教師を辞め、幼児教育の世界に飛び込んだ。最初から「よし、実践研究を！」などと意気込んだわけではない。日本保育学会の存在も知らず、一から保育を学び、目の前の子どもと明日の保育をどうするかに日々追われていた。というのも転職して入った園は過去5年で園児が100人減り、先生も半分以上が入れ替わるという園だったからだ。当然、実践研究どころではない。しかし、今思えば、あの頃の保育の立て直しが今の実践研究の礎となっていたであろう。

半分以上が新卒、30歳の主任と20代の先生達。この保育者組織で保育を語ろうとしても、すべてが疑問だらけだった。遊びとは何か、設定保育はダメなのか、保護者との連携は…。日々の保育のほぼすべてが疑問だらけ、問いだらけである。わからなくても園児は登園してくるので、まずはやるしかない。中学校と違い教科書がないので、保育について『幼稚園教育要領』を読む。他園の実践を参観する。参考文献に学ぶ。そして、やったことをまとめて、同僚に伝え、保護者にも伝える。そんなことを1年、2年と続けていくうちに気づけば、伝えるために記したものが実践研究の成果としてまとめられていった。当園の場合は、気づけば実践研究になっていたパターンである。

とは言え、振り返ればきちんと実践研究のステップは踏んできた。まずは問い。わからないものはわからない。疑問に思ったことをそのままにせず、同僚と話を。それでもわからなければ、文献を読む。そして、やってみる。本をいくら読んでも本に載っている子どもは目の前にいないし、議論をいくら重ねても議論通りに動く子どももない。まずはやってみて、そ

の結果をまた同僚と話を。子どもの姿、環境の工夫、保育者の関わり等々。実践研究において「日本保育学会で発表しよう」「実践研究を投稿しよう」という思いが先に立つと、「この問いでいいのだろうか」「今は記録が流行だから記録を中心に研究しよう」など余計なことを考えてしまう。我々現場の人間は、目の前の子どもをどうするかが勝負であって、研究のための研究はいらないのだ。

実践だけ積み重ねてもダメだということも痛感した。議論し、文献を読み、実践を重ねても『実践の壁』にぶつかるのだ。実践の壁とは、本質を理解せず、毎年、毎回、同じような場面、状況でぶつかる壁のことだ。「なぜ、あの子はあのような行動を取るのか」「なぜ、うちの園は毎年、ここで悩むのか」改善するよう努力しても事実と実践の記録を整理し、考察を深めなければ実践の壁にぶつかってしまう。また、考察のポイントがずれると同じ結果しか出てこない。忙しい日々の保育の中で、事実と実践を整理記録することは並大抵のことではない。しかし、保育記録を工夫し定期的かつ継続的にとっていくことで保育の質向上もさることながら実践研究を進める上でも有効な手段となる。時間がない、余裕がないという先生達の状況はわかるが、1日5分の記録の整理だけでも『実践の壁』は回避できるのではないと思う。

最後に「研究したいけど何を研究すれば」という若い保育者がいるのであれば、日々の保育を見つめてみてほしい。どの保育者、どの園にもある『実践の壁』が実践研究へと導いてくれるだろう。

●Profile

井内 聖（いうち せい）

（学）リズム学園 はやき子ども園 園長

2016年から全国初の学校法人による公私連携こども園として安平町のこども園、子育て支援センター、児童館、放課後児童クラブを一体的に運営。

全国初の公私による学校運営協議会も設置し、こども園を中心にした人口減少地域の子育て環境づくりを進めている。

身近なテーマから…あなたもLets' try!

視川 和歌子

私と実践研究との出会いは、「素朴な疑問」「根拠となる数字」「他者への発信」の3つのキーワードでした。そこに「共感する仲間」「行動力」「指導者」がパズルのように組み合わせあって「日本保育学会での発表」へと繋がって行きました。

当時私が抱えていた疑問は、「4月2日生まれ問題」と「3歳児の保育士配置基準」の2点です。前者は、既に制度的にも解決済みですから詳しくは触れませんが、省間の些細な擦れ違いで、長年に亘って保育現場の経営者を悩ませていた問題でした。私たち（私は日本保育協会青年部経営問題委員会で共感を得た友人が代表を務める私的勉強会に所属していました）は、直接厚生労働省の保育課へ押しかけて事実確認をいたしました。ワサモン（好奇心と厚かましき）もアイテムの一つだったのかもしれませんが。2つ目の「3歳児の保育士配置基準」の向上についても、保育課へ陳情に行きました。その時の担当者から「言いたいことはよく解るが、何かを動かそうとするのであれば納得するだけのデータを示さないと」と指摘を受け、皆で顔を寄せ合って案をひねり出し、「調査実績による数字を、日本保育学会で発表しよう!」という結論に辿り着きました。

かっぱ保育園で10年以上継続していた「生活習慣しらすべ」を基に、“3歳児の生活習慣の自立がどのように低下してきているか”に着眼し、金沢・大阪・山口での調査結果を加え、どうにか資料と原稿を整えました。副園長という立場ではありましたが、担任を持ちながらの時間の捻出には結構苦労したと振り返ります。ただ、私以外は全員男性でしたので、会合は家庭や子どもを抱えた私の都合中心でした。本務が疎かになっては本末転倒ですし、他の職員にも悪い影響が出ますので、年休休暇をフルに利用しました。

発表者である私の経験の浅さと知識不足が、心許せなかったのでしょうか。勉強会の顧問でS学園のT教授、厚生労働省保育課のN保育専門官、子育てジャーナリストのY編集長の方々が厳しくご教授くださいました。特に何度も練習を繰り返したのが、「時間厳守」（発表の起承転結と質疑応答を持ち時間内に必ず納めること）でした。自分自身の発表はあっという間に終わり、想定以上に聴講者が居て、質問も内容ではなく統計の取り方についてだけで、私たちの主軸についての反対意見は無かったのでホッとしました。この主軸に関しては、ご存知のように2015年4月から施行された子ども子育て支援新制度において、『3歳児配置改善加算』が提示されたところでした。

保育現場で感じた些細な疑問を見て見ぬ振りをせず、納得するまで調べる・自分で解決できなかったことは素直に訊く・解るまで引き下らない。そんな行

動が出来たのも“若さ故”だったのでしょうか。そして、私たちの気持ちにいつも一本筋が通っていたのは“現場の子どものため”という大義名分があったからでしょう。

テーマは身近にあります。自園で長く取り組んでいる事やその変化、現場が困っている事、以前からそうだったのだから仕方ないというつまらない概念、ゼミで感じた興味の掘り下げ、子育て世帯が直面する困り感...等々。どうぞ皆さんも日本保育学会で実践発表に挑戦してみてください。

最後に、使い古された言葉ですが、私的勉強会の代表が好んで言っている締めの一語「子どもたちの未来のために!」

●Profile

視川 和歌子（すずりかわ わかこ）

社会福祉法人河童福祉会 理事長兼園長、一般社団法人熊本市保育園連盟 理事、未来ほいく21研究（旧：ほいくとパウチャー研究会）チャーターメンバー、他

現在の関心は様々な設置形態に適應する諸指針の統一・小学校への接続連携様式（児童要録や移行支援シート等）の統一、等

「実践研究を通して、人の役に立ちたい」

田中 梨紗

私は、今年で保育者として2年目を迎えます。保育者の経験としてはまだまだ未熟ですが、保育者という職業を感情労働のひとつと捉え、感情の中でも保育者の笑顔について特に関心をもっています。今現在、「保育者の笑顔は子ども達にとってどのような役割があるのだろうか」というテーマで実践研究に取り組んでいます。

私がこのようなテーマで研究を行おうと思ったきっかけは、大学生時代の卒業論文です。私自身、新しい環境やそこでの人間関係作りにおいて不安を覚えることが多く、自らの感情、特に笑顔をありのままに相手に表出することに難しさを感じる事が多くありました。しかし、保育者という職業には笑顔という印象が強いように、保育者の笑顔は、子ども達にとって大きな影響を与える環境の一つとしてとても重要な役割を果たしています。学生時代にボランティアとして、様々な幼稚園、保育所に行かせていただく機会も多く、そこでキラキラとした笑顔で子ども達と関わる保育者の姿を目の当たりにし、私自身もこのような笑顔あふれる保育者になりたいと強く思いました。そこで、保育者は保育においてどのような時に笑顔になり、またどのような思いや意図をもって笑顔を表出しているかを知りたいと思うようになりました。それを知ることが、自らの短所を克服することにつながり、保育者としての自らの資質向上に自然とつながっていくのではないかと考えたのがこのテーマで卒業論文を

書こうと思った大きなきっかけです。そして、調べていく中で、多くの保育者の方々と関わり、今まであまり深く考えることがなかった笑顔の意義や、笑顔の重要性を再確認することができ、自分にとってとても学びあるものになりました。

しかし、研究というのは、求めていく限り終わりが無いものです。保育者となった今、さらに自らの研究の内容をより精緻化したいと思い、それがまた自らのスキルアップにつながると考え、卒論をベースに内容を深めることにしました。このように、今までは自ら資質向上のためという思いで研究を行ってきましたが、研究を重ねていくうちに私のように笑顔に自信がなく笑顔表現に課題を感じている新任の保育者や、将来保育者を目指している学生などがたくさんいるのではないかなと思うようになりました。このような方々が少しでも自信をもって笑顔を表出できるような手助けをしたいと思い、本年度の大会でポスター発表をしてみたいと考えるようになりました。これが、私が実践研究の発表に至る経緯です。発表当日は、多くの方が見に来てくださり、様々な話をさせていただきました。いただいた多くのご指摘やご意見によって、研究における課題や新たな視点に気づかされ、さらにこの研究が人の役に立てるように深めていきたいと強く思うことができました。

私にとって実践研究とは、人の役に立ちたいという思いです。これからも現状に満足せず、多くの人と関わりながら、少しでも社会貢献につながる研究を続けていきたいと思います。

●Profile

田中 梨紗（たなか りさ）

やまなみ幼稚園 教諭

現在、年長児の担任として日々保育実践に励んでいます。また、戦略的な笑顔の意図を明らかにし、保育の目的達成のために保育者が表出する笑顔の表出意識のプロセスについて研究しています。

現場の保育士が実践研究をすること

尾場 幸子

私は、大学卒業後17年間保育士を続けている。新任の頃は目の前の子どもたちに向き合うのに精一杯だったが、経験年数が増すにつれて少しずつ視野が広がり、質の高い保育実践のあり方に関心を持つようになった。とくに、配慮の必要な子どもを含めた集団づくりや保護者支援などに関心を持ち、その関心をさらに深めるため、地元の保育研究会に参加し、2年前に日本保育学会へ入会した。

そうした研究会の場では、他園での課題や優れた保育実践など現場発信の情報だけでなく、大学の先生方による現場から一歩引いたかたちでの実践のあり方を

入手できるなど、たくさんの刺激を戴いた。私は、そこで得られた知識を実践の場へ移し、いくつかの場面で活用したが、その中には少し工夫をしないと上手くいかないものもあった。こうした試行錯誤の経験を研究会のメンバーに話したところ、そこでの実践知の貴重性を教えていただき、それがきっかけで自らも研究発表をするようになった。

さて、研究をするにあたり私が困難に感じたことは、そもそも実践研究の進め方がわからないということであった。何から始め、どうまとめていいかわからず、自分には無理だと一度は諦めた。それでも私が実践研究を進めることができたのは、勤務する園の環境にあったと思う。私が勤めている園は、近隣にたくさんの大学があり、調査研究に協力することが多い。そのため一般的な園よりも、大学の先生と話す機会に恵まれている。そうした利点を活かし、先生方から時間を戴いて研究方法を教わった。このように学んだ中で、最も意識して行っているのが、実践で起こった出来事やその時の様子、保育者の感想などを保育日誌よりも細かく丁寧に書き留めることである。そうして書き留めたメモは、自園の職員研修会の資料として活用され、そこで交わされた意見交換により実践研究の下地のようなものになる。こうした研究者の協力のもと、同僚の保育士との研修の場で活発に話し合えたことは、実践研究を進めていくにあたって私の大きな強みになっている。

そうして進めてきた実践研究の発表は、苦労はあるがそれ以上の大きな収穫が得られる。第一に自らの問題関心や実践での課題を表明することにより、研究者や他園の保育士から様々な意見が戴けるという点である。保育の実践をしていると、自身の経験から保育を主観的に捉えがちになるが、様々な意見を戴くことで、客観的に保育を見つめられるようになる。第二にそうした実践の客観視により、より質の高い保育が追求できる点である。つまり、自らの保育に対する振り返りにより、これまでの実践の弱さを浮かび上げられ、それにどう向き合っていくかが自分に跳ね返ってくる。

実践研究は、研究に留まるのではなく実践に返ってくるのである。私は、そうした点に実践研究をする意義を感じている。まだまだ未熟ではあるが、これからも現場ならではの視点から、より良い保育を追究できるように実践研究を進めていきたい。

●Profile

尾場 幸子（おば さちこ）

京都・朱い実保育園副主任 保育士

配慮の必要な子どもを多く含むクラスを受けもった経験から、どの子どもにとっても居心地のいいクラス集団のあり方に関心を持っている。

日々の保育から問いを見つける

山本 恵莉子

筆者は、保育者が子どもとかかわる際、どのような課題に直面し、解決の糸口を探っていくのかという点に「疑問」を持ち、保育者の事例を基に考察を繰り返し、研究を進めてきた。なぜ、「保育者の課題」に焦点を当てたのかというと、日々の保育の中で、「保育者の課題」というものは絶えず、保育者からも多く語られていると考えるからである。しかし、「課題」と言っても様々あり、区別することは難しい。なぜなら、子どもはそれぞれ考えていることも性格も違い、「子どものことを理解する」ということは簡単ではないと考えるからである。

今年で、保育の現場に入り、4年目となるが、日々の保育の中で「課題」として挙がってくるものは多く、簡単に言葉にできないものばかりである。そこで、その言葉にできない課題を明確にし今後の保育に繋げていきたいと考え、自分自身の事例を考察し、研究を進めることとした。事例を書き、省察していくことは、日々の保育の中でも必要であり、研究をしていく上では、環境は整っているといえる。しかし、日々の保育と平行して行うことは難しいことであると実感している。なぜなら、日々保育をしていく中で、悩みは、増えていくばかりで、考えれば考えるほど解決の糸口を見つけることは容易なことではない。そのような状況で、事例の中から「問い」に対する糸口を探し、まとめるということは、筆者自身、当事者であるがゆえ、いつも苦戦してしまう。その時の保育者としての思いや状況など様々なことが混じり合い、その「問い」の答えが見えぬまま、同じ思考の繰り返しで、考えが固まってしまうことが多いからである。

研究を進めていく中で、今まで主観的に見えていたことが、「なぜ？」なのか、「どうしてこう思ったのか？」など少しずつではあるが、事例を客観的に見ることができると、今までは当たり前のように考えていた「その子理解」のズレに気がついたり、新たな発見に出会えると気づいたりした。特に、筆者の場合、「子どもを理解したい」と頭の中では分かっているが、実際に子どもとかかわる中で、「発達の違い」や「理解できない行為」にぶつかった時の「分からなさ」が難しい問題であり、そこにつまづき、頭を悩ませていることが分かった。子どもとかかわる際、保育者として子どもにとって「よかれ」という思いを持ち、かわろうとすることは当然なことではないだろうか。しかし、保育者にとって無自覚であるかもしれないが、その「よかれ」がいつの間にか保育者にとって「こうなってほしい」という願いや「こうあるべきだ」という思いになり、保育者の中で葛藤が生まれてしまう。保育者も苦しく、先の見えない渦の中に入ってしまった感覚に陥り、負の連鎖で「子どもの悪いところばかり」

に目が行き、課題はますます膨らんでしまう。そうなってしまったときに、そこで悩み終わってしまうのではなく、そこに「疑問」を持ち、自分なりに「問い」を立てることが研究のひとつの手がかりになる。その手がかりが自分自身の「課題」の整理につながり、今まで見えてこなかった新たな発見や「理解」「援助」を探るきっかけになることも多くあると考える。

●Profile

山本 恵莉子（やまもと えりこ）

たづはら保育園 保育士

保育者の課題に焦点を当て、課題の特徴や解決の方向性について関心を持っている。

保育者の集会的実践知を探る

山梨 有子

保育を日々行いながら年月を重ねていく中で、自分自身が今行っている保育に対して疑問を持つことがあるだろう。それは、例えば子どもの行為の中に生まれる小さな変化への気づきかもしれないし、保育環境に対する疑問かもしれない。日々子どもたちが生活する日常の中で生まれてくる小さな問いを意識化し、実践しつつ振り返り、振り返りつつ実践していく。そのような往還の中で、保育の実践研究が始まるのではないかと考える。

日々実践（や業務）を重ねながら、これらの問いと実践と省察を繰り返しながら体系化していくのは労力のいることかもしれない。しかし、当事者である実践者だからこそ見える風景や聞こえることばもあり、保育者が実践研究を行うことに保育実践における意味があるのではないだろうか。

現在は、メモや日誌、エピソードを手掛かりとした文字記録の他、写真や映像などの画像記録等を基にした実践研究の方法もあるが、ここでは、筆者の経験を記したいと思う。そこでは、保育者の実践的知恵を探り出す手法の一つとして、保育者ヘインタビューをし、すべり台の特性を探り出すということを主題とした。一人の実践者であろうと、よく考える人ならば、知見や考察を提起できるかもしれないが、多くの保育者に同様のことを尋ね、それらを総合することにより、保育者の集会的実践知を探り出せるのではないかと考えたからである。

筆者は保育者であった時に、それまで何気なく過ごしていた保育環境にどのような意味が埋め込まれているのか、また、保育者がどのようにその環境を捉えて保育しているかという問いが生まれた。そこから詳細について探っていったのである。実際には、インタビューを通し、すべり台遊びの詳細を整理し、子どもが行うすべり台遊びにおける可能性について考察した。まずは、逐語録からキーワードを抽出したものをカテ

ゴリー化し考察をつけ、次にカテゴリーごとの各事例について考察をつける方法をとった。ここでの事例検討では、子どもや保育者の様子を知りながら、筆者の保育者としての経験を活かし、心理現象の記述やモデル構成を行った。

この方法では、実際に筆者自身が問いについて実践をしながら進めたわけではないが、多くの保育者の語りから詳細を知り、集め、眺め、考えをまとめながら、一つの知見を導くことに繋がったのではないかと考えている。インタビューに協力して頂いた多くの保育者も、ここで語った多くの事柄を自身が記述する文字記録では、表現しきれないこともあったのではないだろうか。インタビューという聞き手がいながら、自分の保育を振り返り語るという方法により、普段は意識化していない保育実践についても表現することがで

きたのではないだろうかと感じた。

保育実践研究には、様々な方法があるが、保育者がその当事者ならではの視点をとり入れながら、問い続けていくことは、実践の場と研究の場とを相互に繋げながらより良い保育を目指していくこととして意義があると考ええる。今後も、日々の保育を手掛かりとし、問いを持ち続け、保育者としての感性を持ちつつ、語り合い、探究しながら、保育実践研究を続けていきたい。

●Profile

山梨 有子（やまなし ゆうこ）

所属

サクセスホールディングス株式会社サクセス子ども子育て研究所 研究員

ルーテル学院大学 流通経済大学 非常勤講師